

間に当科で超音波検査を施行した37例のうち、病理組織学的あるいは臨床的に診断のついた25例を対象に、超音波像の分析を行い、CT 併用症例は必要に応じ CT 像との対応を試みた。内訳は、炎症9例、嚢胞5例、良性腫瘍5例、悪性腫瘍3例、その他唾石など3例。超音波像の分析は、得られた病変像について境界・辺縁、内部エコーの強度・分析、後方エコーの増強の5項目について検討した。断層像は 7.5MHz メカニカルセクタ探触子を用いたBモード法によった。その結果、辺縁と内部エコーの分布とに注目すると、嚢胞と良性腫瘍との鑑別に有効と思われた。CT との対応では、病変の内部性状の描出に、CT より優れる場合があることが示された。本領域の画像診断において超音波像を有効に利用するには、CT との両者の特長を活かした適切な連携が重要と思われる。

14) Myositis ossificans の画像診断 2 症例と文献的考察

大幸実和子・似鳥 俊明 (杏林大学)
岡田 稔・高山 誠 (放射線科)
古屋 儀郎

myositis ossificans は骨格外骨形成を呈する良性疾患で、外傷により発症するが、実際には半数が外傷の既成なく発症している。また、生検標本の組織診断によっても soft tissue sarcoma と判別困難な例が少なくなく、無用な広範囲切除術を避けるうえで画像診断上重要な疾患といえる。

短期間に成熟を示し、特徴的な“zone phenomenon”を呈することが、病理上の本症の性格だが、画像診断上の要点もまたこの病理的特徴に相当する所見を見出すことにあるといえる。今回主に CT により上記2つの特徴像を観察し診断することができた myositis ossificans の2例を文献的考察を加えて報告した。

15) リアルタイム Paging, Reformation, 3Dimage の臨床的応用

新妻 伸二・小林 晋一 (県立がんセンター)
清水 克英・佐藤 洋子 (新潟病院放射線科)
古泉 直也

CT の画像処理として、Paging (Interpolation Cine Mode 補完送り) あるいは Reformation, 3Dimage などの方法があるが、今回われわれの CT 装置横河製 Quantex RX に1~2分でそれらの画像処理が可能なソフトが導入された。従来は例えば 3D イメージに1時間などの、長時間の処理が必要なため、臨床応用が困難であったが、日常の検査に利用可能となった。その実

際の使用例をビデオで展示した。

16) 胃間接続影法の反省

長谷川敏之・熱田 修 (新潟市医師会)

昭和59~61年の胃間接続影は、要精検率を下げることに、より効率的な集検をめざし、読影者Aのチェックしたものを、より読影経験の長いBが再チェックし、その一部を除外すると共に、B自身がチェックしたものを更にBが除外する方法を試みた。

延受診数26,291、発見胃癌99(50)、発見率0.377%、早期癌率50.51%。発見胃癌中79(79.80%)はA・Bチェック、13(13.13%)はAチェック、7(7.07%)はBチェックであった。

除外数は59年868、60年1,280、61年1,029で、要精検率は10.75~13.55%減少し、それぞれ17.34、14.14、16.54%となった。これら除外群を追跡すると、AチェックB除外206からの偽陰性0、BチェックB除外2,971から11(5)・0.370%の発見率同等の偽陰性例が発見された。即ち翌年検診発見8(4)、1年以内手術3(1)である。レトロスペクティブにみれば、進行癌 2/6、早期癌 5/5 に所見がみられたことから、除外にはより慎重な読影がのぞまれる。

17) 空腸平滑筋腫瘍の3例

道野慎太郎・高木 一 (公立昭和病院)
桜井 賢二 (放射線科)

消化管出血の原因の1つとなる小腸腫瘍は他の消化管腫瘍に比べ発生頻度が低く小腸の解剖学的位置関係より、その診断は比較的困難である。今回我々は原因不明の下血で入院した空腸平滑筋腫瘍3例を経験し、核医学検査、CT、血管撮影を施行しこれらの検査が各々腫瘍の診断に有効であったと考えられた。核医学検査では3例中2例で腫瘍への集積あるいは消化管内への出血の所見が得られた。しかし1例に対してはなんら情報を得られなかった。CT では全例小腸に一致した solid mass が描出され、血管撮影でも小腸平滑筋腫瘍の特徴的な所見を得ることができた。以上小腸平滑筋腫瘍の3例を報告した。

18) 最近経験した家族性褐色細胞腫について

林 浩子・西原真美子 (新潟大学)
木村 元政・椎名 真 (放射線科)
武田 正之・高橋 等 (泌尿器科)

最近我々は悪性脾臓ラ氏島腫瘍を合併した家族性褐色

細胞腫2例を経験した。発端者は43歳男性、腹部不快感を主訴に来院、2例めは発端者の長男、14歳男児で、意識消失発作を契機に発症、両者とも、高血圧、ノルアドレナリン高値、画像より、両側性褐色細胞腫の診断は比較的容易であった。一方、腓腫瘍に関して、両者とも内分泌学的に異常はなく、画像上も確定診断は困難であった。

なお、腓ラ氏島腫瘍合併例は1987年現在、Griffithsらによれば本邦例2例を含め、世界でも16例と極めて珍しく、貴重な例である。さらに今回経験した2症例とも神経内分泌顆粒を染め出す glimelius 染色に、副腎・腓腫瘍とも強陽性で、内分泌学的にも、腫瘍の起源を考える上でも意義深いと考えられる。

特別講演

中枢神経系の核医学診断

新潟大学医学部放射線医学教室

小田野 幾 雄 助教授

第17回新潟救急医学会

日時 昭和63年11月19日(土)

午後2時より

会場 新潟大学医学部大講堂

一般演題

1) 3点式シートベルトによる脊椎損傷の3例

羽尾 清昭・谷代 弘三
勝見 政寛・渡辺 政則
中屋 愛作・今井 春雄
八木沢克則・吉津 孝衛
牧 裕

(新潟中央病院) 整形外科

本間 隆夫 (新潟大学) 整形外科

事故発生時における搭乗者の被害を減少させるという目的で開発されたシートベルトは開発当初2点式であったが、その後改良が重ねられ現在3点式シートベルトが普及されている。昭和61年11月からシートベルトの着用の義務付け以来、死亡事故は減少したが、シートベルトによる外傷が散見される。今回、3点式シートベルトが原因であると考えられる頸椎損傷2例、腰椎損傷1例を経験した。

症例1は20才、女性、第3頸椎亜脱臼のため、頸椎前方固定術を施行し、経過良好である。症例2は72才、女

性、環軸椎脱臼のため死亡した。症例3は18才、男性、第一腰椎圧迫骨折で保存的に治療した。メカニズムは頸椎では衝突の急減速で肩ベルトが支点となり頭部の慣性のため頸椎が過屈曲を強制されるによると思われる、症例3では肩ベルトが支点となり腰椎に屈曲力と回旋力が生じたためと思われる。

2) ドクターズカーの利用状況と運用上の問題点

本多 拓・樋熊 紀雄 (新潟市民病院) 救命救急センター
小田 良彦 (同 新生児医療センター)

新潟市民病院救命救急センターにドクターズカーが導入されて1年7ヶ月が過ぎた。その間に救命救急センター29件、新生児医療センター244件、計273回(15件/月)の出動があった。新生児医療センターは患者搬送が殆どであったが、救命救急センターの利用は病状安定患者の病院間搬送が大部分であった。

初療時の病状安定化に果す医師の役割は当然である。迅速な医師の確保、同乗者の身分保証、車輛の管理などの諸問題はクリア出来ても、新潟市民病院に滞りず、巾広く医療機関が利用出来るにはどうあったらよいか、更には当地方における救急医療は如何に方向づけるか、各界からなる総合的機関での検討が待たれる。

救急車との分担の明確化、ドクターズカーと救急車の協力の在り方なども大切な課題である。

3) 救急事故種別に対する救急患者の観察と処置並びに救急医療体制について

鷺津 由松 (新潟市西消防署) 小針救急分隊長

救急隊は、救急事故を15種類に分類していますが、そのうち、労災事故と自損についての症例をあげ、私なりの所感を申し上げます。

労災事故例として、某食品工場で従業員の女性が、食品加工機の回転軸に右腕を肘近くまで巻き込まれ、抜くことが出来なくなった事故で、N病院の医師と看護婦から救急車で現場に来ていただき、点滴と麻酔を施し、回転軸を逆回転させ救助したもので、結果は右手挫滅切断でありましたが、医師現場派遣により救助した少ない例であります。自損については、中年の男性が腹部を庖丁で切創し腸が露出していたもので、応急手当を施し、T病院に連絡をとったが、手術中で収容不能との返事により新大救急部と市民病院に指令室を通じ依頼し、走行していたところ、容態が急変したため、たまたま、新大付近でもあったので返答がないまま新大病院に搬送し処置